幼児の探究活動としての「共鳴的探究」とはどう起こるのか
（他に使っているかもしれないが、たぶん、私の命名ならん。）

「共鳴的探究」と命名した活動は、環境への出会いからの遊びが探究性を帯びていき（つまり物事の特質と可能性を探る方向に進み始めた時）、さらにそれが並行するような活動へと飛び火して、次第にそれらの間のつながりが生まれて、活動が広がりつつ、深化していく過程を指す。

１）試行する。

幼児はまずやってみる、つくって見る、試して見る、表してみる。それがまさに遊びなのである。そして沈思黙考しない。直ぐに始める。手が動く。身体が振る舞いを開始する。（いつまず考える作業がまず始まるのだろうか。多くの人の想定より遙かに遅く、そもそもそんなことは人間はしないのかもしれない。ただ、歳が重なると、文字・記号表現のメモに頼るようになる。）幼児はメモ的な略図表現はしないわけでもないが、めったにはしないで、まず活動として始めて、それから見直し手、再びやっていく。つまり試行錯誤するのである。

２）連想する。

幼児はしばしば活動の断片からの連想で動く。活動のまとまりの意味を捉えてそこから次へと行動するという習慣となっていないからである（認知的にも高度すぎる）。それは脱線となっていき、でもそれらの活動を共に見ることも多く、いつの間にかどこかしらつながりも生まれたりする。それらを通して当初の活動は広がり、多くの子どもを巻き込んでいく。(そうなる類いの活動がクラス全体へと広がり発展する活動へと展開するだろう。)

３）イメージ的探索

試行錯誤の活動が多少とも進むと、そこから少し先に実現したいことのイメージが生まれてくる。それはたまたまできたことの再現もしようとするし、連想で生まれた活動の可能性をおも言う陰ることもあり、単に活動で慣れてきたことをさらに延長させ累積させようとすることもある。それらはまだ実現していないわけだが、いまの活動の発展上で可能になるような感じを持てる。それは一種のイメージとしての探索である。ああなったらいい、こうしてみたい、ということがいくつもイメージとしてつまりいまの事態の少し先の変形の中で可能になりそうなことを捉え、それをいくつも作り出していくのであり、連想的に広がっていく。

このイメージで出てくることの何かが試行錯誤され、結果として目標として選択され、それが実現可能そうだと感じると、目標志向としての工夫が生まれていく。だが、イメージの探究から起こるのであり、それは目標として固定的でなく、いつでも撤回され、変更され、やり直しされるだろう。その試行錯誤の経過自体が次への連想を引き起こすのでもある。

４）スキルと道具の活用

実現過程に入ると、特定のものや活動の変形が必要であり、それは身体的な工夫であり、同時に道具を用いることでもあるから、大いに経験が活用される。直接的応用はできずとも、とりあえず試すことはできる。上手くいくこともそうでないこともあるが、うまく行かないにしても新たなことが生まれて、それが面白いと感じることもある。

イメージを超えて物・人との実現となるので、しばしば実現したいことの変動が大きく

なり、偶然も起こり、気まぐれが左右もするが、同時に目標としてのイメージを広げて、いまの現実へと照合を進めるようにもなる。

それは各種の方向へのきめ細かさを生みだす。イメージの茫漠さに対してリアルなものの持つ繊細さがそこに生まれて、活動はその肌理の味わいを含み込むようになる。

５）リアル世界での実践とつなぐ

リアルな世界の実践活動とどこかでつなぐことは子どもの共鳴探究活動を飛躍させる。通り一遍でしか見ていない事柄のいわば裏側が見えて､その子細なところが分かってきて、活動の繊細さが一気にその大きな構造的な流れとつながり、活動の骨格が生まれるのである。そこでは、子どものごっこと現実世界の活動のいりまじりが起こり、子どもの作り出す活動がファンタジーでもなくリアルでもない中間的な活動世界を作り出す。探究はそのような新たな世界構築へと進むのだが、それは実は後のモデル的世界の探究としての各種の科学的あるいは学問的な探究の始まりでもあり、その身体的で物体的で対人的な関係の基盤づくりとなるのである。